

ＪＡあいち豊田の「山ごぼう」再興の取組

～定年帰農者らが新たな担い手となって復活！中山間地の特産品「山ごぼう」～

西山 彰宏（東三河農林水産事務所農業改良普及課

前・豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課）

【令和元年10月7日掲載】

【要約】

「山ごぼう」は独特な風味と食感で人気がある。栽培においては、適切な密度で斉一に発芽させること、雑草対策をすること、最小限の負担で効率的に収穫すること等がポイントとなる。

ＪＡあいち豊田では、「農ライフ創生センター」の修了生らを担い手として受け入れ、山ごぼうの産地を復活させた。栽培のコツをつかんだ部会役員とＪＡ、普及課が協力して、栽培に必要な技術を明確にし、部会加入者へ分かりやすく伝える工夫をしたことが奏功し、産地は小さいながらも活気を帯びている。

1 はじめに

ＪＡあいち豊田では、「山ごぼう産地」の再興に向けて、豊田市とＪＡが運営する研修機関「農ライフ創生センター」と連携して新たな担い手を確保するとともに、農業改良普及課と共にわかりやすい栽培指針の作成を進めて技術の浸透を図り、産地の再興につなげた。その取組の経緯と栽培技術のポイントについて紹介する。

2 「山ごぼう」について

「山ごぼう」は流通上の俗称で、正式には「モリアザミ」という。これは、キク科アザミ属の植物であり、25cm程に伸びたごぼうの様な根を漬物等で食するものである。一方で、ヨウシュヤマゴボウという有毒な植物が存在しており、混同を避けるために、あえて「山ごぼう」と表記している。



写真1 山ごぼう

※ＪＡあいち豊田では写真の4.3kg詰め
の箱出荷のほか、330g詰めの袋出荷も取
り扱っている

3 産地再興の経緯

山ごぼうは、冷涼な気候を好むため、愛知県と岐阜県の県境周辺、標高の高い地域で古くから栽培されてきた。ＪＡあいち豊田管内では、中山間地域において山ごぼう部会が活動していたが、高齢化や連作障害で部会員が減少し、平成19年度に解散してしまった。

山ごぼうの産地消失を惜しむ声は強く、農ライフ創生センターでは、定年退職者をはじめ農作物の栽培に興味を持った者を新たな農業の担い手として育成するカリキュラムの中で山ごぼうを栽培する機会を提供し、産地再興の時機を窺ってきた。この取組が奏功し、山ごぼうの魅力を知った修了生の中から、本格的に栽培したいと思う者が集まってまず同好会ができ、市場出荷で販路を広げようと平成26年度には15名で新生の生産・出荷組織「山ごぼう部会」を発足させるに至った。

J Aあいち豊田は、その後も毎年新規加入者を募り、農ライフ創生センターの修了生らが続々と加入して、平成31年3月末時点の部会員数は29名まで増えている。

J Aあいち豊田の山ごぼう部会は、経営的には大面積で取り組む北海道や長野県の産地には遠く及ばないが、手堀り収穫による高品質と丁寧な選別で市場から評価される産地になりつつある。

また、消費拡大のため、豊田市公設地方卸売市場で年末に開催する市場開放日において、小袋入り山ごぼうの即売を行っている。即売する山ごぼうは瞬く間に売り切れてしまう程、大変な人気を博している。

4 見て分かりやすい栽培指針の作成

栽培においては、適切な密度で斉一に発芽させること、雑草対策をすること、最小限の負担で効率的に収穫すること等がポイントとなる。

部会発足当初は、文字主体の資料で説明していたため理解が進まず、必須の作業が実践されていないことが多く、は種しても出荷に至らない部会員が少なくなかった。

このため、全栽培ほ場における生育・管理方法等を平成28年度から2年をかけて調査し、当地域で取り組むべき技術を明確にするとともに、模範となる作業工程を写真等で記録して、平成29年度末には、写真やイラストで分かりやすく伝える栽培指針を作成した。具体的な作業方法はJ A担当者がDVDを作成し、動画で確認できるようにした。

こうした過程では、栽培に長けた部会役員をはじめ全部会員が協力し、J A、普及課も一体となって産地力強化に向けて取り組んだ。

5 栽培指針の内容～技術ポイントの一部紹介～

(1) は種量の適正化

全員の栽培ほ場を実測し、単位面積当たりのは種量と、生育及び収穫の状況と照合した。粗植では枝根が増え、密植では細根になる傾向が見られたことなどから、適切なは種量を1 aあたり150 g (約300ml) とした。

適切な量を確実に種するため、手播きをやめ、ベルトの回転で一定量をは種できる手押し式のは種機で条まきすることに統一した。条間は、除草農具の使用を考慮して15cmとし、1 畝の条数は、通路から手が届く5～6条を標準とした。使用するベルトは、種子を捕捉するベルト穴の間隔と投下種子量の相関を調べて推奨品番を決定した。

部会では、全員がは種機を利用できるように、共用するは種機を2台確保した。

(2) 斉一な発芽

山ごぼうは、好光性種子であること、高温、乾燥を嫌うことを考慮しては種する。

ア 畝成形後、畝の上へ空のドラム缶などを転がして鎮圧し、毛管現象で土壌を乾きにくくしてからは種する。

イ 手押し式は種機の前輪の後ろには、溝を切って種子を投下する部品があるが、その溝切刃を1 cm下げては種する。後輪で鎮圧された後、覆土は0.5cm前後となる。

なお、土が湿った状態では種すると溝切刃に土が詰まって種子を投下できなくなる場合があるため、畝の表面が乾いた状態で作業する。

- ウ 豊田市の平地では8月下旬、標高400m以上の中山間地では8月上旬には種する。
は種から降霜までの日数は、90～100日を確保する。
- エ は種後に畝上に敷くもみ殻は、厚く敷き過ぎると熱がこもって芽やけを生じる場合があるため、地面が見えなくなる程度に薄く敷き、その上に白い寒冷紗で覆う。
- オ は種から本葉1枚展開するまでは、朝夕の涼しい時間（6～8時、16～18時）に寒冷紗の上から灌水する。灌水量は、200ℓ/aを目安とし、本葉1枚になったら寒冷紗を外し、灌水量は徐々に減らしていく。は種後にはこまめな灌水が必要となるため、新規加入者には、灌水できるほ場を確保するよう念入りに指導している。



写真2 鎮圧の方法



写真3 は種機の使い方

(3) 除草対策

何も対策せずには種すると、土壤中に埋もれていた雑草の種子が、山ごぼうのは種に伴う灌水で同時に発芽することになる。山ごぼうは、初期生育が緩慢なため、草高が急激に増すイヌビユ等の雑草に埋もれて育たなくなる。このため、山ごぼうのロゼット葉が畝を覆って、他の草が生えにくくなるまでの間（は種から1か月半後まで）は、除草作業が必須となる。特に再生農地では雑草が生えやすいので、注意を要する。

ほ場に長時間しゃがみ込んで除草するのは体への負担が大きいため、は種後に生える雑草を減らす方法、立った姿勢で除草する方法、適用のある除草剤を使用する方法を検討した。

ア ほ場に埋もれている雑草の種子を少なくする

- ・ほ場や周囲の雑草は、種子ができる前に必ず刈る。
- ・は種前にもりあざみまたは野菜類の雑草に適用のある土壤消毒剤を使用する。
- ・早めに畝を成形し、散水して先に雑草を生やす。それを柄のついた除草農具でかき取るか、もりあざみまたは野菜類に適用のある除草剤で枯らしてから山ごぼうをは種する。実践したほ場では、は種後の除草が大幅に楽になる効果を確認している。

イ 条間を、柄のついた除草農具で立った姿勢で除草する（ただし、株間は手で取る必要がある。）



図1 柄がついた除草農具の例



写真4 除草作業例

ウ もりあざみに適用があり、収穫の7日前まで使用できる除草剤（イネ科雑草のみを枯らす）を必要に応じて使用する。

(4) 効率的な収穫方法

山ごぼうの根長は25cm前後であり、農業用フォークを使って収穫できる。歯が大きくカーブしていないものを使いやすい。土を大きく動かさずに楽に収穫できることを知ることは、栽培してみよう！という意欲につながる。

ア 山ごぼうは、霜にあたると風味が増すとされるため、原則として降霜後に収穫する。山ごぼうのロゼット葉が霜で枯れたら、草刈り機を使って地際で刈り、葉を掃き集めて片付ける。

- ・葉柄の基部は地中に3cmほど潜り込んでいるので、根を傷つける心配は無い。
- ・ほ場に残渣を残さないことは、連作障害のリスク軽減につながる。

イ フォークを条間に刺し、柄を傾けて山ごぼう周囲の土を緩める。

ウ 緩めた土の中から山ゴボウを抜き取る。



写真5 フォークを使った山ゴボウの収穫方法（周囲の土を緩めた後に抜き取る）

6 実演会等による理解促進

部会では、作付け準備に入る前に、栽培に長けた部会役員による主要作業の実演会も実施している。新規加入者らにとって、栽培指針に示された作業を実際に目で見て体験して理解を深める機会となるもので、内容は、管理機の使い方、畝の立て方、畝を均平にする方法、鎮圧のやり方をはじめ、手押し式は種機の使い方、条間除草で使う除草農具の紹介、農業用フォークを使った収穫方法など主要作業全般をカバーしている。

それに加えて、栽培予定地のほ場を掘って作土深や耕盤の有無を確認し、センチウの発生密度も調べて、作付判断に生かす取組も行っている。

7 成果とまとめ

栽培指針に取り上げる技術の試行を行った平成29年度作は、10月下旬に来襲した台風の被害が大きかったが、は種や除草方法の改善効果を確認できたため、平成29年度末に栽培指針にまとめて配布することを決めた。さっそく、部会加入希望者へ栽培指針とその派生資料を用いて、説明会を開催したところ、内容がわかりやすいと好評で、7名がその場で是非やってみたいと部会加入を決めたことから、大きな手応えを感じた。

栽培指針に基づく栽培を徹底した平成30年度作は、新規栽培者が指針に沿った栽培管理を概ね実践でき、部会の出荷量は前年比167.8%と大きく伸びたことから、栽培指針が部会員全員の技術水準向上につながったと捉えている。

農業技術を視覚情報等でわかりやすく伝えることは、新たに栽培する者に「これならやれる！」「やってみよう！」という意欲を引き出すことにつながり、新規栽培者の確保や栽培技術をレベルアップする一助となる。高齢者が多い部会のため、地域における役職や自分や家族の療養等で休作や脱会を余儀なくされる方が少なからずあり、新規加入者を即戦力とする手法を高めていくことは、産地の維持・発展に不可欠である。作成した栽培指針等は、今後も様々な知見を加えたり、修正したりを繰り返して充実させていく。